

矢野仁一著

中国人民革命史論

波多野善大

矢野博士はお歳九四であるときが、この御老人が『中国人民革命史論』をお書きになったという事実には、いわば孫弟子にあたる筆者は、博士の衰えない歴史への情熱と研究への気力をひしひしと感じて、なまけ心をむちもち覚醒される思いがするのである。

ところで、この書は、書名の示すごとく、中国人民革命についての『史論』であって、事実を確める考証的な研究ではない。博士がこの史論をものさされるにあたって使用された資料は、ヘルデンの『中国は世界をゆるがす』、ストロングの『中国人は中国を征服す』、スノーの『中国の赤い星』、ギランの『中国これからの三十年』、ポーヴォアールの『中国の発見』などのルポルタージュ、蒋介石の『中国のなかのソ連』などのメモリアル、および『孫文全集』『毛沢東全(選?)集』、波多野乾一『中国共産党史』、アメリカ國務省『中国白書』などである。

博士が、この著書で論じておられる時期は、国共の提携による国民革命期から国共の分裂内戦、日中戦争期の国共の再提携をへて、戦後の国共内戦で中共が勝ち人民革命に成功するまでの期間

である。中国史で、重要な史料がほとんど出つくして歴史研究の領域になっている時代の下限は、おそらく辛亥革命だと思われるから、博士がこの史論の対象とされた時代は、まだ真の意味では歴史研究の領域にはなりえない、つまり、重要な史料がまだ発表されていない時代ではあるが、それでも、国民革命期については『蘇連陰謀文証彙編』およびそれを批判的に利用したウィルバー教授らの *Documents on Communism, Nationalism and Soviet Adversers in China 1918-1927*, Columbia U. P., 1956 とか、蒋介石の日記を基礎にした毛思誠の『民国十五年以前之蒋介石先生』、国共内戦期のものとしては、江西ソヴェト攻撃の中心人物陳誠の集めた資料に基づく『赤匪反動文件彙編』(原資料は陳誠文庫に蔵す)、日中戦争中のものとしては、旧陸軍省文書およびそれを利用した C. A. シェンソンの *Peasant Nationalism and Communist Power*, Stanford U. P., 1962、スチルウェル文書をはじめとするアメリカ側の資料を利用した Tang Tsou *America's Failure in China 1941-1950*, U. of Chicago Press, 1963 などの重要な資料や研究が出されているが、これらは利用されていない。

それはともかく、この著書は、史論であるために、矢野博士の、中国史およびそのなかに位置する人民革命についての考え方が如実に展開されていて興味ぶかい。

博士は、まず、人民革命を、伝統的な士庶の階級、吏害・匪害・河害を消滅させ、土の階級の文化、人民の福利を犠牲にした文化を人民大衆の文化、人民に奉仕する文化に変革し、半植民地

的条件を廢除したものととして、世界史上の画期的な歴史的事件の一つと評価される。中国史上では、易姓革命があつたのみで、辛亥革命でさえ社会・文化の性格を変えたものではなかつたとの観点に立たれる博士は、人民革命を、中国史上唯一の社会的文化的革命であり、しかも従来政治にたいして無関心無自覚であつた農民が地主の搾取から自らを解放した画期的な革命であると評価されるのである。というのは、博士は、歴代の易姓革命その他太平天国に至るまで農民革命とは無縁のもので、(四一頁、五七頁)農民がはじめて団体や組合を組織して農民革命をやつたのは人民革命のみであると考えておられるからである。

人民革命への方向は、孫文がロシアの十月革命の影響をうけて国共合作にふみぎつたことに発端する(博士は、孫文が国共合作にふみぎつた過程については深く立入らず、簡単に十月革命の影響と考へておられる)。この国共合作では、孫文とマーリンとの約束、孫文・ヨッフエの共同宣言によつて、地主である国民党員の参加する国民革命の達成を妨げるような農民革命運動は行わない、ことになつていたので、毛沢東は湖南で農民革命運動をおこして失敗したが、これは、「国民党(共産党?)が、国民革命の段階において、これを不可能ならしむる農民革命を、孫文との約束に背いて行つたための刑罰(九一頁)」であつたと博士はいわれる。そして、国民党の指導権を認め、これとの合作を維持して国民革命を遂行しようとした陳独秀の方向(これはコミンテルンの指令に従つたもの(筆者)こそこの時期においては正しいものであつたとして陳独秀を弁護される。したがつて、北伐が途中で挫折したのは、「いまは国民革命の段階で、国民革命こそ革命の主流

にして、これを妨げる農民革命運動をすべきでない」と断乎主張すべきであつたのにこれができなかつた国民党の責任で、孫文の意志をつぐ後継者がいなくなつたからであると主張される。要するに、北伐の時期は国民革命の段階で、国民革命こそ革命の主流であり、これを阻害する農民革命は反革命であり反主流であるが、農民革命を主張する共産党に眩惑されて、国民党が国民革命を反主流のごとく考えるに至つたことは、自主性の喪失、自己放棄で、空中分解は当然であつた(二一七〜八頁、二二三〜四頁)と博士はいわれる。

また、第二次大戦後の国共の内戦で中共軍が勝利したことについて、腐敗し革命性を喪失した国民党にたいし、農村に根拠地をもち農民に支持された中共軍が勝つのは当然で、「国民政府軍の勝つべき理由は一つもない。……歴史がくり返し立証したように、民心を得るものは天下を得、民心を失うものは天下を失うにきまつているからである」(二〇七頁)といわれる。中共軍は天命をえたものだとの意であらう。

博士は、革命後の新中国が、無階級無搾取の社会、文化の国となり、世界で犯罪のもつとも少ない国の一つとなり、教育が普及して文盲が減少し、下放によつてソ連のような修正主義にならないうよう努力していることをたたえ、新中国は、人民に奉仕し、決定的に資本主義に復帰する惧れのない社会主義国家であり、米國との対立のなかで永久闘争、永久革命をし、中国の勝利を見るまで永久に腐敗を知らない社会主義国家とならう、その勝敗は、世界人類の最大多数の真の利益、真の幸福が、この両体制のいずれによつて達成されるかによつてきまらう、との中国の未来像をえ

がいておられる。

博士は、序文の冒頭で、ベルデンの『中国は世界をゆるがす』、ストロングの『中国人は中国を征服す』、スノーの『中国の赤い星』三冊を読んだとき、数十年の読書生活を通じてかつて経験したことがない感激を覚えたこと、それは、毛沢東ら中共の要人が、「身を持つること勤儉、士卒と艱苦を共にし、実に質素簡約、自己抑制の生活に甘んじ、身を以って範を示しているから、共産黨員は勿論、民衆もかれらを慈父のごとく尊敬し、指導者として専心支持している」という叙述が胸をうったからだとのべておられる。博士のいだいておられる東洋の王者の理想の姿がそこに見出せたからだろう。戦前は、中国官僚の腐敗が日本人の軽蔑のたねになったものだが、戦後における日本の指導者の腐敗のひどさと反対に、中国では中共によって東洋的な理想的指導者の現実の姿が明かにされて、博士を驚かせ感激させたのであろう*。

しかし、それにもかかわらず、博士が、戦前の史家が抱いていた中国史の考え方からぬけきれないでおられる様子が見られて興味ぶかい。というのは、博士は、人民大衆の中国史上での政治的役割を全然認めておられないし（五頁、四一頁）、その文化も低俗として退けておられる（二二五頁、二三九〜四〇頁）。つまり、士の階

級の文化が中国文化の精華であるとの考え方を變えておられないのである。したがって、中共で儒教文化、儒教倫理が顧りみられないのをなげかれ、孝道の復活をのぞまれる（二二六頁）。とすると、博士にたいし、こんな質問がなされるのではなからうか。中国史上での人民大衆の政治的役割を認めておられない博士は、どうして農民が自らを解放する人民革命を成し遂げることができたと考えておられるのですか。また、儒教文化や儒教倫理を保存することと、人民革命を遂行することが矛盾することなく両立するのでしょうか。

なお附録として、「中国における共産主義の成功についてのトインビー教授の歴史観」なる論文がおさめられている。（B4版二八二頁、昭和四十一年十二月、カルピス株式会社刊、非売品）。

* この点について先生におたずねしたところ、ごていねいに御教示をえた。先生の御教示によると、先生を感激させたのは、まさにこの事実であった。これは、人文科学研究所でのこの書の批評会の席上での、小野川秀美氏の想像と一致するものである。

* 先生の御答によると、先生は、孫文や毛沢東が農民運動を援助したからだのお考えである。なお、最後の点についてはききもらしてしまった。